特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ会誌
2013 年 9 月

もくじ

タンチョウの衝突事故は私たち市民の意識が問われています　・・・1

ロシアにおけるタンチョウの繁殖状況調査　・・・・2

2012 年度　活動・財務報告・・4

2013 年度　活動計画　・・・・7

事故死するタンチョウを減らすために～タンチョウの電線・車・列車衝突事故防止への取り組み～　・・8

調査活動報告　・・・・9

活動記録　・・・10

公開シンポジウム「タンチョウの生息地拡大をどうとらえるか」　・・・10

タンチョウの衝突事故は
私たち市民の意識が問われています

理事長　百瀬邦和

釧路地方では、昨年からタンチョウの交通事故が話題になっています。標茶町の線路内で保護された孵化後間もない２羽のヒナは、ヒナを守ろうとして現場で列車にはねられた親鳥の写真とともにメディアにたびたび取り上げられました。今夏、厚岸町内でせっかく始められた JR 北海道の徐行運転の取り組みですが、この区間外で列車にはねられたと思われるヒナが見つかりました。その後も、同町の国道上ではヒナが保護されています。

タンチョウ保護研究グループでは、関係者に集まっていただいて、タンチョウの衝突事故対策を考えるワークショップを開きました（８ページ参照）。行政側の各方面から参加していただき、それぞれの実情と対策がある程度示されたかと思います。衝突事故問題に限らず、私たちはタンチョウに関する保護その他の対応は行政に預けてしまっている感があります。例えば、傷病個体の保護収容にあたっては市民が直接関わる場面も多いのですが、収容後の扱いに関しては市民の意識から無くなってしまいがちです。ワークショップの中では、こうした問題についての指摘もありました。タンチョウの衝突事故に関わる問題はタンチョウと共存していこうとする私たち市民の姿勢が問われていることでもあると感じています。

ロシアにおけるタンチョウの繁殖状況調査　　正富欣之

昨年８月に続き、５月 17 日～ 24 日の日程で、ロシアに生息するタンチョウの調査を実施しました。この調査は、環境省の環境研究総合推進費（以下、推進費）による研究の一環として行いました。昨年の調査では、育雛期の生息状況を確認し、Platform Transmitter Terminal（ 以下、PTT）という衛星追跡送信機をタンチョウに装着しました。今年の調査目的は営巣期の繁殖状況を確認することです。まず、昨年と変わっていて驚いたことは、ウラジオストク空港が新しくなっていたことです。昨年は、ちょうど APEC 首脳会議の前に行ったので、まだ古い空港でした。次に驚いたのは、ロシアへの入国手続きです。昨年は、ウラジオストク空港到着後に入国カードを記入しなければなりませんでしたが、今年はパスポートを提示するだけで、情報を読み取れるようになったようです。また、昨年の入国時には、全員荷物検査を受けさせられていましたが、今回は抜き打ち的に数名が検査室に通されていました。そのため、拍子抜けするほど簡単に入国できました。悪いことをしているわけでも、「ヤバい」物を持ち込んでいるわけでもないのですが（笑）

写真１　調査で滞在した家のブドウ畑をバックに記念撮影

ところで、皆さんは日本とウラジオストクの時差が何時間かご存知でしょうか？答えは、２時間です。北海道、特に釧路からだと、ウラジオストクはかな

写真２　ロシア・ハンカ湖南東岸の湿原（Dmitry Korobov 氏撮影）

写真３　調査で使用したヘリコプター（Korobov 氏撮影）

り西（経度で約 13 度）にあります。西にあるのだから、当然ウラジオストクの方が２時間遅れていると考えてしまいます。しかし、実際には日本時間の方が２時間遅れています。釧路から九州に行くよりも東西に移動していないのに、２時間の時差があるため、ロシア滞在中は 21 時でも外が明るく、時間の感覚がおかしくなりました。

この推進費では、タンチョウの北海道とロシア極東における生息地の比較を行います。ロシアにおける調査は、ロシアの研究者の方々（写真 1）と協力して行っています。調査はもちろんのこと、現地での生活全般で大変お世話になりました。昨年は、推進費が使用できる期日と PTT を装着する関係上、8 月上旬の育雛期に調査を行いました。今年は、北海道とロシア極東の営巣期の状況をより直接的に比較するため､当初５月中旬の調査を予定していました。しかし、今年度は暫定予算の関係で、5 月 20 日までに使用できる金額が限られてしまったため、実際の調査が 5 月 21 日以降になるように、日程を遅らせなければなりませんでした。

調査地は、ウラジオストクから直線距離で約 160km 北にある、ハンカ湖という湖の南東岸に広がる湿原（写真 2）です。この湿原上空をヘリコプター（写真 3）で飛行し、タンチョウを探します。タンチョウが見つかった際に、場所、羽数、巣・ヒナの有無などを記録します｡今回の調査結果ですが、ヒナを含まないで 82 羽のタンチョウを確認しました。そのうち、つがいと思われるのは 33 組で、3 つがいが巣（写真 4）に就いていて、16 つがいがヒナを連れていました。日程を遅らせた影響と思われますが、すでにヒナが孵っているつがいが多く見られました。まだ、詳細な比較を行っていませんが、今回の調査地域の調査面積当たりのつがい数は、釧路湿原周辺部の約半分であることがわかりました。逆に言えば、ハンカ湖南東岸の湿原に比べて、釧路湿原周辺部には約２倍もの密度でタンチョウが繁殖していることになります。一般的には、繁殖密度が高くなりすぎると、繁殖率の低下など、悪影響を及ぼすことが知られています。今後も、ロシアと北海道の生息状況について、詳細な比較検討を行っていきます。

写真４　タンチョウの巣　２個の有色卵（Korobov 氏撮影）

余談ですが、今回のような調査旅行の場合、お土産を買っている時間がありません。今年は、ウラジオストク空港が新しくなったということで、帰りに空港で何か買えるかもしれないと期待していました。しかし、見事に期待を裏切られました。店は数件あったのですが、「ロシア土産」というと品物がほとんど何も置いていないような状況でした。ですが、何も買わないのも空港で見送ってくれた家族に申し訳ないので、子供にマトリョーシカの形をしたマグネット（写真 5）を買いました。貰った本人は気に入ってくれたようです。

写真５　マトリョーシカの形をしたマグネット
裏にマグネットが接着してあるロシアらしい？作り

2012 年度　活動・財務報告

2012 年度活動報告

★調査研究活動

○タンチョウ繁殖状況調査

繁殖状況調査は 4 月 28 日から 5 月 21 日（第一回）と 6 月 5 日（十勝川のみ）に実施しました。2012 年は例年にも増して天候が不順だったのに加え、使用できる飛行機の関係で女満別空港がベースになりました。摩周から知床にかけての山を挟んだ調査地と飛行場との両方で飛行可能な日が少なく、調査を行ったのは 11 日間だったのにもかかわらず、終了までには結局 24 日間もかかってしまいました。この間 8 名の調査員が交替で参加し、のべ飛行時間は 49 時間 46 分でした。

調査に限っての集計では、確認した巣数は 280、家族数は 7、ヒナを除いた確認総数は 861 羽でした。この結果は 2 年前の 2010 年 4 月に比べて、繁殖つがい数は 12％ほど少なかったのですが、一方で確認できた個体数は約 8％多くなっています。

○タンチョウ標識調査

標識調査は 6 月 23 日から 7 月 22 日の期間で行いました。調査は主に週末に行ない、のべ日数は 15 日間、標識個体数は 17 羽となりました。2012 年は春先の大雨で、最初の繁殖（主に 4 月頃に産卵）が失敗に終わった可能性があり、全般的に小さいヒナが多かったです。捕獲を試みようとしたところ、ヒナが小さすぎて中止したこともありました。ヒナを 2 羽連れているものも少なく、いずれもヒナ 1 羽連れの家族ばかりでした。

調査には 50 名以上の方がボランティアで協力して下さいました。

○タンチョウ総数調査

タンチョウ総数調査を 1 月 26 日から 2 月 5 日にかけて実施しました。26・27 日は鶴居村、28・29 日は阿寒町、2 月 1・2 日は標茶町周辺、3 日は音別町、4 日は十勝地区、5 日は根室・浜中地区で調査を行いました。

のべ 201 名のボランティアの方のご協力をいただきました。また、第 3 回国際エコキャンプに参加したロシア・中国・韓国の研究者・学生さんたちも調査に参加しました。

○タンチョウ生息地分散

環境省からの受託事業で「生息地分散のための給餌場利用個体行動追跡業務」を実施しました。日本野鳥の会 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリで、1 月 16 日に幼鳥 1 羽を捕獲し、GPS ロガーを装着して放鳥しました。この個体が給餌場に滞在している間にはデータの読み出しができなかったため、年度内には成果が得られませんでした。

○シマフクロウ・タンチョウを指標とした生物多様性保全事業

2012 年度より 3 年間、環境省の環境研究総合推進費で実施している事業です。最新のシマフクロウ・タンチョウの分布・生息状況を、発信機・CCD カメラ等により調査し、他のサブテーマに必要な個体・個体群情報を収集提供するための研究です。

2012 年は、北海道のタンチョウの繁殖（生息）状況調査、ロシア・ハンカ湖東岸における繁殖（生息）状況調査、衛星追跡送信機（PTT）による位置追跡調査、標識鳥の追跡を行ないました。シマフクロウの生息状況調査として、個体数の安定した増加の阻害要因の特定、シマフクロウの生息状況モニタリング、CCD カメラを利用したシマフクロウの繁殖生態情報収集を行ないました。

○ PTT 装着個体の追跡

2010 年度のサントリー世界愛鳥基金の助成による事業の継続です。2011 年 2 月に PTT を装着して放鳥した個体（標識「142」：釧路市丹頂鶴自然公園で孵化）の追跡を行っていましたが、2012 年 10 月末で受信が出来なくなりました。

★ 保護・保全活動

○タンチョウ生息地分散

環境省からの受託事業「タンチョウの生息地を分

散させるための具体的な手法について話し合うワークショップ」を、3月3・4日に開催しました。環境省が今年度策定を計画している「タンチョウ生息地分散行動計画」の中にある、過密化を緩和し新たな生息地へ分散させるための手法として、より具体的なものを検討するために、タンチョウの専門家12名が集まり議論を行いました。

ワークショップでは給餌場での過度な集中の緩和や、給餌に依存しない個体群を創出するためにはどうしたらよいか、新たな生息地に分散させるためにはどうしたらよいかなど、具体的な手法について話し合いました。

○傷病個体保護収容への協力等

2012年7月24日、環境省釧路事務所に協力して、中標津町内の牧場でスラリータンクから保護収容されたヒナの対応に当たりました。9月27日には、環境省の担当者と共に、浜中町内の牧場でスラリータンクに落下したヒナの保護収容を行いました。どちらのヒナも健康上の問題はなく、親との合流が可能だと判断できたため、標識を付けて現場で放鳥しました。その後、2羽のヒナは越冬地鶴居村で確認されています。

○中標津俵橋湿原プロジェクト

作業は中標津俵橋湿原プロジェクトの中標津在住のメンバーと共同で行いました。

6月9日に俵橋湿原内の町有地にデントコーンの種まきを行いました。前年はエゾシカに若い芽を食べられて全滅してしまったので、2012年は環境省釧路自然環境事務所から電気牧柵を借りて畑の周囲に張り、食害対策を行いました。エゾシカによる食害はなかったものの、蒔いた種をカラスが食べてしまったようで、発芽したのは全体の2～3割程度でした。しかし、その後2回の除草作業を行ったこともあり、立派に育ちました。9月27日には電気牧柵の撤去を行い、10月5日に実ったデントコーンを利用して冬季給餌台（ニオ型）を設置しました。ニオを組むにはデントコーンの茎が足りなかったので、会員の榊原源士氏に分けていただきました。（運搬用のトラックも貸していただきました。）

しかし、1～2月にはタンチョウがニオを利用した様子がありませんでした。今冬、特に気温の低い日が多かったため、ねぐらである標津川が凍ったことが理由ではないかと思っています。2013年度は、凍ることのない支流の武佐川にねぐらをシフトさせられないかと考えています。

俵橋湿原では、プロジェクトメンバーの大河原氏が中心となって10月16日から20日にかけてカスミ網を使った小鳥類の標識調査が行われ、同地では初記録となる2種を含む9種が標識放鳥されました。

○キナシベツ湿原プロジェクト

昨年に引き続き、会員の真野徹氏が中心となり、カスミ網を使った小鳥類の標識調査と目視による定点調査を10月3日から18日にかけて行いました。標識調査では19種1778羽を放鳥しました。

1月23日から2月1日まで行った第3回国際エコキャンプの中で、「キナシベツ湿原を愛する会」の榊原源士氏が、参加した学生たちに同地の自然環境について現地案内と解説をしてくださいました。

○タンチョウ監視等

釧路湿原広里地区で行われている環境省の自然再生事業に関わる各種調査活動がタンチョウの生息に悪影響を与えないように監視する業務の一部を行いました。

○提言等

北海道開発局池田河川事務所の実施する十勝川築堤工事に際して、タンチョウの生息に配慮すべき注意事項についてコメントしました。

根室振興局の農村整備事業についてタンチョウの繁殖に悪影響を与えないためのヒアリングに対応しました。

★教育普及活動

○タンチョウその他ツル類に関する講演・講習会

2013年1月30日、釧路市立博物館において、第3回国際エコキャンプ記念講演会を釧路市立博物館と共催で開催しました。トランスバイカル国立師範大学のタチアナ・ティカチューク教授（ロシア）、韓国ツルネットワークのリー キーサップ博士（韓国）、北京ブルックス教育センターのカン ユン氏（中

国)、国際タンチョウネットワークの百瀬ゆりあ氏（日本）が講演しました。

○会報の発行・ホームページ制作等

会報「Tancho」第 16 号を 8 月 1 日に、第 17 号を 11 月 28 日に、第 18 号を 2013 年 3 月 29 日に発行しました。ホームページを 1 月にリニューアルし、活動状況の発信を行いました。

○出版物の発行等（標識個体の情報展示、タンチョウ解説の為の小冊子他）

会員の西岡秀観氏が担当してくださり、標識鳥ファイルを 2 年ぶりに全面改訂しました。

小冊子［湿地の神 II」（編集長：井上雅子氏）を作成し、釧路市教育委員会などのほか、国際タンチョウネットワークの協力を得てロシア、中国、韓国に配布しました。

★ 国際協力活動

○国際タンチョウネットワークと協力（中国のタンチョウ生息地とその周辺国境地帯における普及啓発の為の国際プロジェクト、中国・韓国・ロシアにおけるタンチョウの生息状況把握）

10 月 6 日から 17 日にかけて、中国ツムジ自然保護区、モモゲ自然保護区でのでの学生達による教育普及活動（国際ネイチャースクール）に百瀬邦和、本藤泰朗の 2 名が参加しました。

11 月 29-30 日に北京で国際タンチョウネットワーク (IRCN) のカウンシル会議が開催され、百瀬邦和・松本文雄・百瀬ゆりあの 3 名が出席しました。今回は第一期最終年のカウンシル会議で、第二期の役員選挙が行なわれ、百瀬ゆりあが引き続き代表をつとめることになりました。

2013 年 1 月 23 日から 2 月 1 日までの 9 泊 10 日の日程で第 3 回国際エコキャンプを行いました。ロシア・中国・韓国の 3 か国の学生が各 3 名（計 9 名）と、引率の講師 3 名が来釧しました。タンチョウ総数調査に参加するとともに、北海道の野生動物が生息する環境を体感し、お互いの交流を深めました。引率の講師による講演会や、釧路湿原周辺で活躍する団体とのワークショップも行うなど、非常に充実した内容でした。

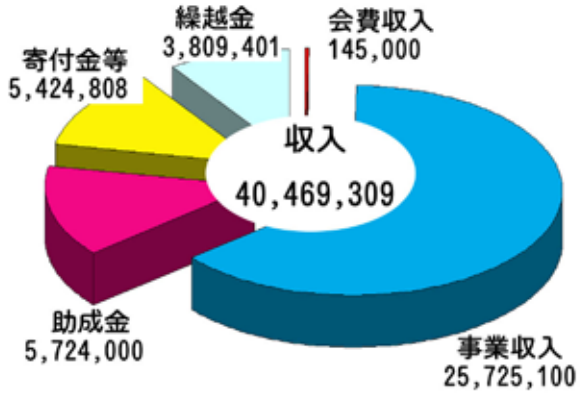
○世界のツル関係者との交流及び情報交換

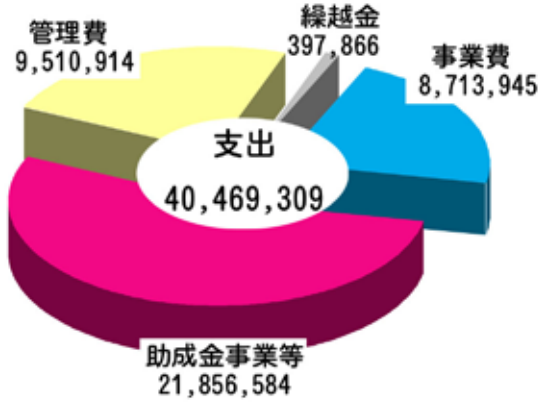
12 月 3 日から 7 日、国際ツル財団と北京林業大学との共催で、ツルの国際会議『ツルの保護と持続可能な農業』が中国の北京と湖南省ユエヤンと東洞庭湖国立自然保護区において開かれました。理事長の百瀬邦和、国際タンチョウネットワーク (IRCN) 代表の百瀬ゆりあが招聘され参加しました。理事長は日本のタンチョウの現状についての講演をし、百瀬ゆりあはセッションチェアーと進行役をつとめました。10 ヵ国から 100 人以上もの専門家・当局者・メディアが集まり、活発な意見交換や講演がなされ、“Call to Action” という声明が出されました。

この会議に前後して、12 月 1・2 日と 12 月 8・9 日に、サイドセッションとして開かれた国際自然保護連合とウェットランドインターナショナルが主催した「ツル専門家会議」と「『ツルと電線衝突』の会議」にも参加しました。会議の結果、電線衝突に関するネットワークを設立することになりました。

12 月 20 日から 27 日にかけて理事長が韓国を訪問し、12 月 21 日にヨンチョン（漣川）で開かれた「ツル類保護と地域の発展をどのように両立させるか」というテーマで開かれたワークショップに出席し、講演しました。また、同 23 日にチョロン（鐵原）郡の文民統制地帯内の地区会館で開かれた第一回ツルフェスティバルでも講演しました。このワークショップと講演会には、韓国国内の関係者に加えて、日本から鹿児島県出水市の「出水市ツル博物館クレインパークいずみ」の原口優子学芸員も招聘され、日本の 2 大ツル生息地に於ける人とツルとの関わりについて報告しました。ワークショップの後、ヨンチョンとチョロンでツル類のカウント調査にも参加しました。

2012 年度収支報告（単位：円）





注：会費収入は運営会員の会費によるものです．サポート会員の会費は寄付金等に入れています。

2013 年度　活動計画

★調査研究活動

- タンチョウ繁殖状況調査：飛行機による調査と、繁殖期の地上調査により営巣状況を把握する。
- タンチョウ標識調査：ヒナへの標識と追跡調査を行う。
- タンチョウ総数調査：厳冬期に生息数を調べる。
- タンチョウ生息地分散：給餌場外の環境利用状況を調べるために越冬中の個体に GPS 付きの送信機を取り付け、越冬地分散候補地の選定等の資料とする。
- シマフクロウ・タンチョウを指標とした生物多様性保全事業：環境研究総合推進費（環境省）による調査研究を行う。

★ 保護・保全活動

- 傷病個体保護収容への協力等：環境省の傷病個体の保護収容等に協力する。
- 中標津俵橋湿原プロジェクトの推進：同地での越冬地整備を行う。
- キナシベツ湿原プロジェクトの推進：環境調査、将来の保護計画策定等に参加する。
- タンチョウ監視・提言等：タンチョウ生息地での各種事業に際して監視・提言を行う。

★教育普及活動

- タンチョウその他ツル類に関する講演・講習会を開催する。
- 会報を発行するとともに、ホームページの更新を行う。
- 出版物の発行等：標識鳥ファイルと小冊子［湿地の神 III］を作成・発行する、

★ 国際協力活動

- 国際タンチョウネットワークの活動（中国のタンチョウ生息地とその周辺国境地帯における普及啓発の為の国際プロジェクト、中国・韓国・ロシアにおけるタンチョウの生息状況把握）に協力・参加する。
- 世界のツル関係者との交流及び情報交換を行う。

事故死するタンチョウを減らすために　井上雅子
～タンチョウの電線・車・列車衝突事故防止への取り組み～

近年、タンチョウと交通機関との衝突事故が増えてきています。同様の問題を抱えている沖縄県のヤンバルクイナの衝突死に対する取り組みが参考になるのではないかと考え、6月12日（水）に釧路市生涯学習センターでワークショップを行いました。

基調講演として長嶺 隆氏（ＮＰＯ法人どうぶつたちの病院 沖縄　理事長）をお招きし、「ヤンバルクイナでの交通事故の現状とその対策」をお話しいただきました。交通事故を減らすための注意喚起の看板設置や地元の子供たちへの教育など、地域一体となってヤンバルクイナを保護しようとする意識がどのように根付いていったのか、よくわかりました。

地元からは３名の講演がありました。

澁谷辰生氏（厚岸水鳥観察館）による「列車事故の現状（事例報告とその対策）」では、毎年のように事故が起きていた場所でも別のつがいに代わってからは起きなくなったので、個体差もあるのではないかという話でした。

飯間裕子氏（釧路市動物園 獣医師）からは「収容されたタンチョウの現状について」という題目で、年間30羽近く運び込まれる死体や傷病タンチョウの事故原因について、これまで多かった電線衝突事故が減って代わりに交通事故や列車事故が増えているとのことが話されました。

正富宏之氏（タンチョウ保護研究グループ理事）からは「タンチョウの事故死は個体群へどのような影響を与えるか」と題して、これまでの事故調査を踏まえ、基本的なデータの作成と整理の必要性、それらの蓄積をもとに今後のタンチョウ保護につなげていくことについて話していただきました。

午後からのディスカッションでは、事故を減らすための具体案もいくつか提示されました。環境省からは把握しているこれまでの事故の状況を、北海道開発局釧路開発建設部からは事故防止対策を、JR北海道からは列車事故多発地帯での減速運転の取り組みなども話していただきました。

交通事故を減らすには、やはりスピードを落とすことが一番です。注意喚起のために期間限定の看板を設置したり、道路上のゼブラゾーンも有効でしょう。看板は直接事故を減らすためですが、そこへ来る人たちへの、こういうことをやっていますよというアピールの意味もあります。実際の設置に際しては、関係機関の協力も必要です。

今回のワークショップは、サントリー世界愛鳥基金の助成を受けて行いました。おそらく初めてと思われますが、関係機関を含め、タンチョウの衝突事故対策を話し合う集まりを開くことができたことは大変有意義だったと思います。今後はこれらを実施する方向で取り組んでいくことが必要となります。

その日の夜には、長峰氏による講演会「幾重にも保全策を実行する　ヤンバルクイナの現状」を一般市民向けに行いました。

沖縄県北部のやんばる地方にだけ生息しているヤンバルクイナが、ハブ対策で持ち込まれたマングースや捨てられた猫によって捕食され、絶滅の危機に瀕していました。地元の人たちの協力により、マングースは捕獲、捨てられた猫は避妊手術や里親捜しが行われ、道路には警戒標識看板の設置といった対策が取られた結果、ヤンバルクイナの生息数が増えていったというお話でした。こうした具体的な話はなかなか聞く機会がないので、大変興味深く、またこのような保護活動には、関係機関だけではなく、地元の人たちの協力が不可欠であると思いました。

調査活動報告

＜繁殖状況調査＞

今年の繁殖状況調査は、４月 22 日から５月 11 日にかけて行いました。昨年同様、風や低い雲によって飛行できない日が多くあり、十勝の広尾町から北見市紋別町まで、12 日間で計 47 時間 50 分飛行しました。飛行機には６名の調査員が２－３名づつ交代で搭乗しました。

写真の記録チェックなど、結果についての詳細な確認作業がまだ終わっていませんが、確認できた繁殖つがい数（一時集計では 382）総個体数（一時集計では 895 羽）ともに昨年よりも多く、４月一回の結果としてはこれまでの最多となりました。

今年は、春になってからまとまった積雪があったため、抱卵に入るタイミングが比較的揃ったのではないかと思っています。また、初期の繁殖失敗によるやり直しを含めて、抱卵に入った時期が遅かったために、ヒナが孵って巣を離れてしまったつがいが少なかったのかもしれません。今後、記録の確認作業を進めると同時に、標識調査に関連した地上からの観察や聞き取りなどの調査を進めて、出来るだけ正確な繁殖つがい数を出していく予定です。

＜標識調査＞

今年の標識調査は６月 29 日から７月 27 日まで行いました。当初は６月 22 日に開始する予定だったのですが、予備調査で見つかったヒナが何処も小さめであったため、調査の開始日を一週間遅らせました。それでも調査を終えた７月下旬になると、親と見間違う程に大きくなったヒナも見られるようになりました。今年の調査実施日は、主に土日と祝日を使って 13 日間、その間に雨で中止にした日が１日ありました。

ボランティアで調査に参加して下さった方は 53 名（のべ 162 名）にのぼります。また、調査には直接参加できなかったものの、ヒナ連れの家族が通っている牧場を紹介して、さらには事前に調査実施の了解を得るまで話を進めて下さった方もいらっしゃいます。近年は牧場付きの家族が多いのですが、調査に際して牧場内への立ち入りなど、協力をお願いに伺った牧場の方々は、気持ちよく協力して下さいました。皆様、どうもありがとうございます。

今年標識したヒナの数は 18 羽となりました。この中には２羽の兄弟（姉妹？）が１組含まれています。また、十勝川水系上流部の新しい場所で標識した例もあり、秋以降にどのように動きがあるのか楽しみです。

＜ GPS ロガーを使った冬期行動圏調査＞

この調査は環境省のタンチョウ保護増殖事業「生息地分散のための給餌場利用個体行動追跡業務」によるものです。給餌場を利用しているタンチョウに GPS ロガー（送信機能付きの GPS*記録装置）を装着し、給餌場及び給餌場周辺における自然採餌場の利用状況、利用されるねぐらの環境特性、給餌場間の移動などを調べるためのものです。GPS ロガーは、タンチョウに装着した後、給餌場などで至近距離から受信機を使ってロガーに記録された過去の位置情報を読み取ることができるというものです。

ロガーを装着するタンチョウの捕獲は、日本野鳥の会 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリの協力で、12 月 18 日、給餌場にある倉庫の裏に無双網をセットするところから始まりました。当初は２羽に装着する予定でしたが、３月 15 日までかけて１羽を捕獲するのみに留まりました。１月 16 日に捕獲した幼鳥に GPS ロガーを装着して現場で放鳥しました。

鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリによると、この個体は放鳥された翌日から２月６日までほぼ毎日給餌場で観察されていました。その後、２月９・10 日に、14km 東にある標茶町茅沼駅給餌場に家族で現れた後、４月になってから、さらに 70km 近く東北東にある別海町中春別の牧場に親鳥と共に移動しているという目撃情報が入りました。環境省担当者が現地で GPS の情報を読み取ることに成功しました。

＊ GPS：グローバル・ポジショニング・システム。衛星を利用して、位置情報を測定するシステムのこと。今回使用した機器は、GPS によって一定時間毎にタンチョウがいた場所が記録され、後から記録を読み出す事ができるものです。

〈活動記録〉（2013 年 4 月～ 2013 年 7 月）

3 月 21 日　JAL 本社訪問（法人の活動への協力を要請）
4 月 1 日　会報 Tancho18 号発送
4 月 5 日　運営会議 (8 名出席)
4 月 15 日　サントリー世界愛鳥基金の授賞式出席
4 月 22 日～ 5 月 11 日
繁殖状況調査実施
（十勝，釧路，根室，オホーツク）
5 月 13 日　運営会議 (7 名出席)
5 月 17 日　JAL 本社訪問（法人の活動への協力について打ち合わせ）
5 月 17 日～ 24 日
ロシアのハンカ湖周辺でタンチョウの繁殖状況調査
5 月 27 日　北海道開発局池田河川事務所で十勝川での河川工事におけるタンチョウ保護対策に関する意見交換会に出席
5 月 25 日　2013 年度第一回理事会
5 月 26 日　2013 年度定例総会
6 月 3 日　運営会議 (9 名出席)
6 月 9 日　俵橋湿原でデントコーン種まき
6 月 12 日　ワークショップ「事故死するタンチョウを減らすために ～タンチョウの電線・車・列車事故防止への取り組み～」開催　(於：釧路市生涯学習センター)
6 月 15 日　標識調査勉強会
(於：釧路市民活動センター)
6 月 29 日～ 7 月 27 日
標識調査実施
7 月 10 日　運営会議 (6 名出席)

トピック

公開シンポジウム
「タンチョウの生息地拡大を
どうとらえるか」

６月２２日に釧路市阿寒町阿寒湖畔にある「まりむ館」で、日本野鳥の会釧路支部が北海道内の支部総会にあわせ、表記の公開シンポジウムを開きました。環境省が示したタンチョウの人為的な生息地分散の方針を受け、道内各支部の会員はどうとらえているか、声を聞きたいと思ったのがきっかけだそうです。

少数ながらも道東以外の道内各地に目撃はあり、一部では繁殖も確認しています。冬の人工給餌に依存せざるをえない現状の中、夏季においても、自然環境だけではなく人の暮らしがある環境を利用して生きるタンチョウが増えています。道東では、すでに“多すぎる”と感じるほど、身近な（ある意味迷惑な）存在ですが、一方で、同じ道内でも“珍しい”“縁起がよい”と喜ばれニュースになる地域もあります。

鶴居村の方が報告したタンチョウによる酪農業への被害の事例は、参加者を驚かせました。昨今からの問題ではなく、人工給餌が始まった頃から畑への侵入や作物被害など人との軋轢がありました。電線衝突や交通事故も毎年報告されます。同じように、今後分散していく場所でも、負の面が課題となるでしょう。あらためて、野生生物との関わり方を考えた情報発信の重要性を感じました。

＜会員（7 月 12 日現在）＞
運営会員：26 名、個人サポート会員：145 名、団体会員：13 団体

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter　TANCHO
Nineteenth issue　September 2013

＜表紙写真＞
ロシア・ハンカ湖岸の湿原のタンチョウ家族
（2013 年 5 月　Dmitry KOROBOV 氏撮影）

特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ
（編集：松本文雄）
〒 085-0036
北海道釧路市若竹町 9 番 21 号
Tel/Fax 0154-22-1993
e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp
URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213